

中露海洋戦略の非対称性

漢和防務評論 20131127(抄訳)

平可夫

阿部信行

(訳者コメント)

今年 7 月に行われた中露海上軍事演習について漢和防務評論誌の主幹平可夫氏の評論を紹介します。

同氏はロシアに思い入れがあり、最近のロシア海軍の退潮ぶりを批判しています。また中国海軍の海洋戦略「中国の利益の国境あるところに中国海軍あり」についても解説しています。同氏は中露海軍の現在の状況を評しており、興味深い記事であると思います。

秘密保護法が成立し、外交防衛のネックの一つが解消されたものと祝杯をあげたい気分です。それにしても A 紙のネガティブキャンペーンには呆れます。マスコミ業界人は、付き合い上、反対していたのでしょうか。今日は日本晴れ！

この 7 月に行われた 2013 年中露海上軍事演習に参加した両国艦艇を比較すると、発展中の中国海軍と没落中のロシア海軍の実態が具体的に理解できる。演習に参加した 7 艘の中国海軍艦艇の艦齢は平均 10 年以下であり、単艦のトン数は 4400～7000 トンであった。また中国参加艦艇は 3 大艦隊のバランスが取れており、フェーズド・アレイ・レーダーを装備した 052C 型、RIM-F 艦対空ミサイルを装備した 051C 型、SHTIL-1 型中距離防空ミサイルを搭載した 052B 型ミサイル駆逐艦、及び 2 艘の 054A 型ミサイル護衛艦が主力を構成していた。一方のロシア海軍は、艦齢が平均 30 年以上であり、この演習は、“中露” 軍事演習と言うよりも、“中ソ” 軍事演習と言った方が正確だったかもしれない。

フェーズド・アレイ・レーダー、コールド・ローンチ・システムは、21 世紀の水上艦にとって“お飾り”ではなく、現代の海戦で飽和攻撃に対抗するためには不可欠の技術である。中国海軍は、少なくとも名義上すでに装備している。2013 年のサンクトペテルブルグ海軍装備展覧会において、ロシア海軍は、艦載フェーズド・アレイ・レーダーを展示しなかった。2 年前の同展覧会において、ロシア NIIP レーダー設計局は初めて艦載フェーズド・アレイ・レーダーを展示した。総設計師は、KDR の教師である YURI GUSKOV である。この艦載フェーズド・アレイ・レーダーは、MIG-35 戦闘機の PHAZOTRON-ZHUK-AE レーダーを改良したものであり、360 度に変換し、同時に大出力のオプトエレクトロニクス・トラッキング・システムを装着することが出来るが、残念なことに 2

年経過しても、この設計概念はどのロシア海軍艦艇にも採用されていない。
率直に言えば、ロシア時代になってから建造された大型水上艦は、2000 トン級の 22350 型パトロール艦が 3 艘のみであり、4600 トン級護衛艦 6 艘 (11356R) 及び 7 艘 (22350) の建造計画はやっと着手されたばかりである。

まず海軍の問題を取り上げる。なぜ中国海軍はソ連に代わってますます水上艦艇の大型化を図るのであるのか？しかも伝統的な海洋覇権国家であるロシアはなぜ水上艦艇の小型化を逐次進めつつあるのだろうか？ここには予算問題のほか、海洋戦略の根本的变化があり、KDR はロシアの現在の海洋覇権思想が過去のものであることを認めざるを得ない。

今年のサンクトペテルブルグ海軍装備展覧会における海軍装備建設検討会で、ロシア聯合造船集団の副総裁は、ロシア海軍の将来発展について若干の構想を示した。同展覧会では 5000 トン以上の大型水上艦艇は展示されなかった。一方大量の 500 トン、600 トン級の近海パトロール艦を展示し、そのうち PROJECT22500 が最も注目された。排水量はわずか 500 トンで、ヘリ甲板、垂直発射システム、複合式マスト等、完全なステルス化を図っていた。聯合造船集団の副総裁は、会議中次のように強調した。すなわち、「今後のロシア造船工業は、海賊対処のための多用途船舶を建造し、ロシアの新たな海上の脅威に対応するための需要を満足させる必要がある」と。

海賊対処などは、ロシアのような大国の海洋戦略の方向として正しいのであろうか？海賊対処のための船舶が艦対艦ミサイル、垂直発射システム及び複合式マストが必要であろうか？よく検討せよと言いたい。ロシア海軍は、本質的に、海洋戦略理論の上で混乱の段階に入ったと KDR は考える。ロシア海軍の戦略は、1920 年代初期の”小艦隊””小海軍”の時代、”海軍とは陸軍の海上拡張部門”とした時代に逆戻りしたようだ。

一方の中国海軍は、”大祖国解放戦争”後、海軍司令官クズネツォフが唱導する”大海軍””大艦隊”時代に入った。ロシアは、空母建造の構想を暫時放棄した。これはすなわち”戦略的後退”の具体的な現れである。新たな計画を見ると、ロシア海軍の発展戦略の主軸は、有効な核打撃力を確保することである。同時に近海防御の作戦任務を達成し、適宜遠洋航海を実施して大国としての海上実力を展示することにある、と。正にこれに基づいて、ロシアには、今後 10 年以内に 5000 トン以上の駆逐艦、護衛艦の建造計画は無い。わずかに 1 艘の現役空母を維持するだけである。この程度の水上艦、海軍航空部隊では、遠海、その

他の大洋において海上ハイテク戦争を戦うことはできない。特に強力な海軍を有する NATO 海軍には太刀打ちできない。一方の中国海軍は、積極的に大洋に進出し、遠洋での殲滅戦を戦おうとしている。したがって中国海軍は数多くの空母、壮大な海軍航空部隊、及び艦隊の飽和攻撃対抗能力向上を必要としている。

中露海軍が今回の連合演習で展示した艦船は、いわばロシア太平洋艦隊を極めて気まずいものにした。ロシア時代になって建造した新造船が 1 艘も無かったからである。

中露両国海軍の戦略は、それぞれ相反する方向に変化してしまった。この時期における両国の政治、経済、軍事戦略の発展の違いが、ここに明確に現れている。中国は世界第 2 位の製造業大国として、現在の海上戦略は”利益の国境”を徹底して守ることを第一としている。すなわち所謂”中国の利益の国境の存在するところ、必ず中国海軍は進出する”のである。(人民解放軍機関紙「解放軍報」社説)

この考え方の意義は以下の通りである。

1. 中国海軍は、国家のエネルギー安全を確保しなければならない。この点は、ロシアの置かれた状況とは明らかに異なる。中国のエネルギーは、特に石油資源と天然ガスは世界各地から大量に運ばれてくる。したがって中国海軍の利益の国境は、五大州、四大洋の隅々まで世界各地に拡大し、歴史発展の必然として大海軍が必要になる。しかしロシアは、エネルギー輸出国として緊迫した状況に無く、中国のように主動的な海上エネルギー生命線確保を直接的には求められていない。
2. ロシアは非製造業大国である。輸入する全ての消費物資は、主として西欧の高額商品、奢侈品及び農業製品である。この意味から言えば、ロシアは陸上覇権国家の時代に回帰するとともに、大洋を横断することなくロシアの経済発展を戦略的に満足させることが出来るようになった。
3. 言い換えれば、如何なる国家においても、大洋経済は即ちエネルギー経済であり、特にエネルギー需要の点から見ると、エネルギー経済の為には大海軍を建設することが必然となる。
4. 最も重要なこと、すなわちソ連時代と異なるところは、ロシアには、もはやエネルギー輸出戦略の考え方は不必要になり、当時の”赤い石油”で思想をコントロールした時代は過ぎ去った。この時代は再び戻っては来ない。

5. 当然最も重要な点は、今日のロシア経済の規模が、おおむねソ連時代の 80% に回復したに過ぎないことである。ロシアの 2012 年の GDP 総額は 2 兆 1000 億ドルである。同時期の中国の GDP は、8 兆 2000 億ドルでロシアの 4 倍である。これが大海軍を建設できる実力の差である。

最後に KDR が予測すると、一旦ロシアの GDP が今日の中国のレベルに接近したならば、経済発展の切実性が国家の性格に加算され、ロシアは今後 50 年間に現在よりも規模の大きい海軍を建設せざるを得なくなる。

以上